

2023年1月15日

英語と私

山口岳男（2019年商学研究科修士課程修了）

学生のころから英語に興味を持ち、英語の運用能力をどうしたら高めることができるのだろうかといろいろと試行錯誤をしながら英語と向き合ってきました。振り返ってみれば、大学を卒業して仕事をするようになり、仕事で英語が求められると英語で自分の考えを相手に正確に伝えるにはどうすれば良いのか、どうしたら誤解を与えずに相手にストレスを与えずにメッセージを受け取ってもらえるのだろうか、仕事上の必要性に迫られていたからです。もちろん英語そのものの興味もありましたし、英語人（本稿では英語を母国語とする人を指す）の社会や文化に対する興味もあって続けられたのだと思います。

二度の米国勤務で滞米期間も12年を数え、その後もクロスボーダーM&Aに携わり、英語で仕事をするのが当たり前の環境で仕事できたのはとても幸いなことでした。仕事で使える英語、闘う英語を身につけようと、その間、自分なりにかなりの時間とお金を英語に費やしました。英語で仕事をするにあたって痛切に感じたことは英語を読んで書いて聞いて話すことができる英語力を身につける必要性はもちろんのこと、ビジネスの現場ではそのような英語運用能力だけではなく「怯むことなく臆さずにいかに英語を話すか、いかに自己主張をするか」といういわば「英語を主張するマインド（アサーティブネスと言ってよいと思います）」といったものの重要性でした。英語力とマインド、この二つが備わらなければ仕事では使いえないと実感しています。英語力だけでは不十分でマインドあってこそビジネスで本当に使える英語になるのだと感じます。

リタイアした現在、ビジネスで英語を使うという点ではかなり縁遠くなっていますが、英語に対する興味はいまだ衰えず、ただし、興味はマインドよりもむしろ英語そのものに向かっています。英語で自分の考えをいかに正確に相手に伝えるか、そのために英語をどう組み立てたらよいか、どんな言い回しが適切か、日本的な発想からではなく英語の発想から英語をどう発想して英語を構成するか、英語人相手にストレスを与えずにストレートに心にささる英語をどう使うか、等々に頭を悩ませるのです。英文法を学び直し、英語を読み込み、多くの日英表現のひきだしを持つようと努力していますが、英語運用能力向上はいまだに道半ばで、全く思うようにはいかずに歯痒い思いをしているのが現状です。

本稿ではまず、最初に「1 ビジネスの英語」を取り上げ、仕事を通じて英語とどう取り組んできたか、そして「2 趣味の英語」では今現在の英語の取り組み方の一端を紹介したいと思います。

1 ビジネスの英語

グローバルなビジネスでは英語は権限の源泉だ

経験上、ビジネスパーソンは「英語対話能力」を身につけるべきだ、と常々主張してきましたし、自分でもそうありたいと努めてきました。ここで言う英語の対話能力とは「グローバルなビジネス環境で多様性のあるチーム、その構成員とビジネス関係を構築し、維持しかつ発展させることができる力。そして交渉や説得などにより相手と合意形成を図り所期のビジネスゴールを達成できる英語のマインドも含めた言語力」と考えています。ここで「英語の言語力」としたのは現在英語がビジネスの世界ではLingua Franca・リンガフランカ（世界共通語）としての地位を築いている理由からです。さまざまな国の人々との意思伝達は好むと好まざるとにかかわらず英語なのです。もちろん英語を共通語とすることについてはさまざまな意見があることは承知しています。書店に行けば「英語化は愚民化」「英語の害毒」「英会話不要論」「英語支配」「言語帝国主義」などなどの書籍が書棚に並んでいます。なぜ英語でなければならないか、について様々意見があります。しかし少なくともグローバルなビジネスの世界ではここ数十年は、英語をいわば世界の共通通貨として使用することは変わらないでしょう。

そして、もう一つ見落としてならない点は、世界共通語としての「英語は権限（パワ

一)の源泉」だということです。英語を話さない話せないことは自分の持つ権限の喪失、影響力の喪失を招きます。そうであるからこそ、「マインドも含めた英語力」と言いたいのです。つまり、ただ単に言葉を操るスキルだけではなく、対立を恐れずどう主張するか、そのマインドが大切なのです。

「3S (Silent Smile Sleep) 事件は現場で起きている」

定例で開かれるプロジェクトミーティングでのこと、こんなことがありました。この定例ミーティングはプロジェクト毎に実施され、プロジェクトにかかわるさまざまな問題点や課題を取り上げて解決策を見つけ出し、プロジェクトの進捗状況を確認することが目的でした。プロジェクトは複数あり、日本人と外国人のミックスしたメンバーから構成されていました。いくつかのプロジェクトが同時に走る中でこのときの定例ミーティングの対象となったプロジェクトの担当責任者は日本人、複数のプロジェクトの全体責任者は英語人でした。担当責任者がプロジェクターで進捗状況や隘路事項などの説明をし、説明が一旦終わったところで、外国人であるプロジェクトの全体責任者が予定通りに進まない理由や原因、今後の対策などに関わる一連の質問してきたところ、日本人の責任者は一言二言応答したものの、答えに窮し黙り込む一方で他のプロジェクト員やそれに関連する人たちも敢えて答えることなく、気まずい沈黙が続く中、結局、全体責任者があとで整理して報告してくれ、ということでプロジェクト会議が終了しました。

こうした「事件」はビジネス現場でいくらでも起きていました。英語の問題は別にあるとしても、日本人は会議や打ち合わせの場で自分の言葉で自分の考えや意見を伝える、意見を表明する、反論することを躊躇しがちで、結果、発言しない、意見をいわない、そんな場面を数多く目撃してきました。ビジネスに限らず、スモールトークでも広く社会で起きている出来事などに対して自分の意見を表明することをさける傾向にあるように思います。特に英語での意見表明を求められる際に。

また、意見の対立を個人的な対立ととらえるからか、意見の対立を恐れ、対立に怯む。率直でオープンな意見の表明を避けた曖昧な言い回しをするので何を言いたいのか、特に外国人にはわからないことも起こる。「だから、何を言いたんだ」と罵声が飛ぶ(こともある)。こんなことを数多く目撃してきたし、自分自身がまさに発言しない、主張しないその一員だったりしたことも正直あります。

英語で伝えなければならないので、言いたい事を上手に言えなかったり、上手でないと自分で思っているが故に発言する勇気がでなかったり、発言すれば内容が空疎と笑われるかもしれない、物事を知らないアホな奴だと思われるかもしれない、下手な英語でバカに見られるのではないか、相手の誤解を招いてしまうかもしれない等々(これらは心理学の論理療法では「不合理な信念」といわれるものです)から発言したいのに敢えて発言しないことがあります。そんな時、会議が終わって自己嫌悪にならないわけがありません。反省してみれば、不合理な信念に囚われて自己主張の意思が削がれていたのです。答えるべき内容がなかったとか、論理的な思考や能力が欠如していたわけでは決してないのです。

主張しなければ損だ

なぜこうしたことが起きるのだろうかと解を求めるといくつかそれらしきヒントが見つかります。

ひとつはエドワード T. ホールの「文化を超えて」という著書の中にありました。彼は高コンテクストと低コンテクストという概念で文化の類型化を図りました。彼の類型に従うと日本は高コンテクスト、欧米は低コンテクストという位置づけになるというのです。高コンテクスト文化のコミュニケーションは①間接的で言葉で伝えない非言語的 ②文脈重視で空気を読む、察する ③対立回避型であり、一方の低コンテクスト文化のそれは①直接的で詳しく説明する ②はっきり言う ③対立・衝突は不可避などと言われています。

また、金田一春彦は「日本人の言語表現」という著書の中で「言うな、語るな」が日本人の言語表現で「日本人の言語生活の特色として、まず第一に注意すべきは、話さないこと、書かないことをよしとする精神があるということである」と述べています。

こうした日本的な伝統的なコミュニケーション・スタイルが国際ビジネスコミュニケー

ションにも現れているとも言えます。つまり、「日本人の文章には目的自体がはっきりと明確にのべられていない場合がある。これは日本人の多くが「一を聞いて十を知る」ように訓練されているために国際コミュニケーションの場でさえも相手に「察する」ことを求めてしまうケースがある。ビジネス上、目的をはっきり述べたうえで相手にどのようなアクションを起こしてもらうことを期待しているか、ないしはこちらからどのようなアクションを起こすか、その意図を明確に述べる必要がある。また要件や結果を先に述べるのは相手に失礼だとの配慮から、いろいろな説明を先にする傾向にあるので相手は最後の最後にならないと重要な点がわからないことになる。まず結論を述べて、次に理由を述べさらに最後にもう一度結論を示すことが英語的発想（亀田尚己著 国際ビジネスコミュニケーション再考）」だということです。

一言でいえば、高コンテクスの日本は「お互いにわかりあう文化」で「察しあう文化」であるのに対して低コンテクストの欧米などの国は「説明しあう文化」と言えそうです。しかし、言語表現の文化が違うのだからビジネスの会議や打ち合わせの場で物を言えなくても仕方がないでは済まされないのがビジネスの現場です。自分の意見をアサーティブに主張し、説得していく英語力、そのような対話能力を身につけなければいくら自分の意見は正論だと考えていたとしても筋道を明確にして発言しなければ誰の耳にも届かず響かず、結局はなんの役にも立たないのです。

会議の議論で沈黙し喋らず意見を言わず反論せず、結果、何が起きるか。損得勘定から言えばおおいに損をする、という事です。そう、日本人は議論がわかってない、スマートではない、能力がない、任せられない、信頼ができないなどといわれなきことをいわれる。一方、言葉で押しまくられた結果、日本人は相手を高圧的でけしからん、礼儀を知らない、信用できない等々の印象を持ち、それが不信感を生み出すという、いわばコミュニケーション負の連鎖がスタートするのです。

主張するマインドを持ったひとになる

言葉や文化の違いが問題を引き起こすいろいろな場を経験するなかで次第にわかってきたことがありました。それは、自分自身に心の底からほとぼしる伝えたい思い、主張やメッセージがあることが第一で、それをなんとしても伝えるんだという熱意があり、伝えるための論理性・ロジックと主張の組み立てが必要で、そのためには相手の土俵に立った十分な準備がどうしても必要だということです。そのために次のことを身につけたいと考えたのです。

共通の知的枠組 (Frame of Reference) を広げる

対話「英語力」を身につける

対話「マインド」を身につける

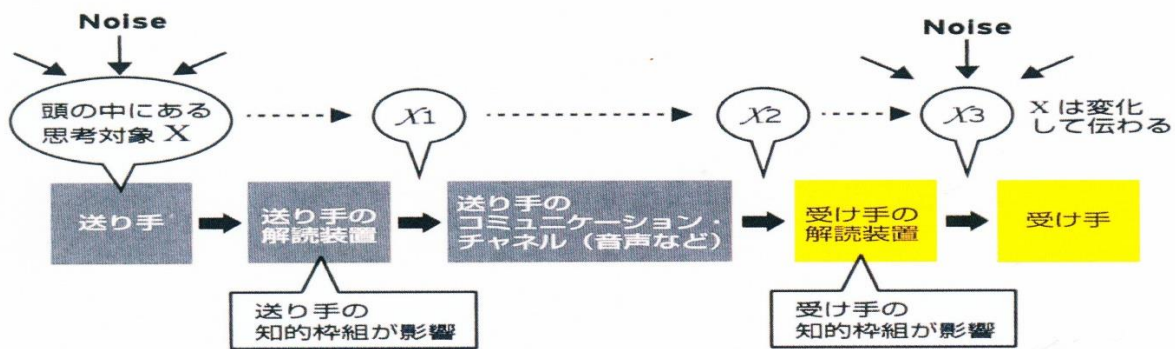
● 共通の知的枠組 (Frame of Reference) を広げる

Frame of Reference を辞書で調べてみると、定義らしきものがあります。

Frame of Reference (FoR) from dictionary.com

“ a structure of concept, values, customs, views, etc., by means of which an individual or group perceives or evaluates data, communicates ideas, and regulates behavior.” つまり、視点、概念、価値観、物の見方などの構造でそれによって個人や集団が物事を理解し、評価する中で行動を形作るものです。ならばこの知的枠組みを広げてみようと考えたのです。

下の図は今ではあまり議論にのぼらない古典的コミュニケーション・プロセスモデルですが、コミュニケーションで何故、誤解が生ずるのかを比較的うまく説明できるモデルだと考えます。そこで、その本来のモデルに Frame of Reference を取り込んでみました。これによってコミュニケーションには知的枠組を拡大することが必要だということが理解できると思います。



送り手の頭の中にある志向対象 (X) を送り手の解読装置でメッセージ化したもの (X1) をコミュニケーション・チャンネル (例えば音声で) 受け手に伝えるのだがこの際、受け手は送り手のメッセージ (X2) を受け手の解読装置で処理されたメッセージ (X3) を受け取る。これがモデルの示すコミュニケーションのプロセスです。ここで送り手と受け手の知的枠組が異なることから Noise が発生し、メッセージの変容、 $X \rightarrow X3$ が生ずる。これが誤解です。

日本人の間ですらお互いの知的枠組の違いから誤解は生ずるし、まして外国人とのコミュニケーションを考えればお互いの知的枠組は大きく違うはずなので大きな誤解を生じる可能性があり得ると考えて間違いないでしょう。従って相手とのコミュニケーションをストレスなく行うためには相手の知的枠組と自己の知的枠組みとに共通する部分を如何に大きくするかにかかっているとと言えます。例えば、一般的に用いられる専門用語を覚えてそれを使うことでどうにか相手の土俵で、つまり共通する知的枠組で議論ができるというものです。こうした分野ごとのターミノロジーは相手と議論をする際に大きな力になります。これを社会や文化や様々な領域に広げる事ができればより良いコミュニケーションができると思います。

● 対話「英語力」を身につける

私の最初の海外勤務はアメリカのニューヨークでしたが、勤務を始めて数年たった時に会社に依頼されて社内報に次のような文章を載せて、英語を軽視している当時の風潮に警鐘を鳴らしました。

「英語なんて片言しかしゃべれなくても度胸さえあればいい。そういう人がいる。しかし、アメリカでビジネスをしようというんだったらそれは絶対に通用しない。勇ましいようで実はたいへんひ弱な考え方だ。そういう人は渡米した最初の日から苦しむだろう。向こうは日本人だといって割り引いてみてくれないのだ。ビジネスの常識と英語力、それに外国でも一人でやれる精神力が必要不可欠。現在はそういう時代である。」

この思いは 30 年経った今でも変わりません。「英語なんて」できなくても手振り身振りでなんとかなる、ということはいまだに耳にするからです。日常生活を送るだけならそれでも良いかもしれませんが、ビジネスではどうにもなりません。目標としてセットすべきはどのレベルか、それを決めることです。とても大変だし、極めて困難な道ですが、私の目指すレベルは仕事で相手と議論し相手を説得しモチベートできる、リーダーシップが発揮できる、目標を達成できる、そんなレベルとしました。ネイティブ・スピーカーを目指すということではありません。自分の言葉で自分の考えを正確に表現できるレベルの「俺の英語」「私の英語」を目指すということです。

「寝ている間に英語を聞くだけで英語が上手くなる」は妄想、「楽しく英語を学ぶ」「海外に行けば英語は上手くなる」は幻想だ。書店に行くとそんな英語の本がたくさん積んであります。本当に笑ってしまいます。そんな安直な道を歩むのではなく、言いたいことを言えない悔しさ、

相手にやり込められた悔しさ、言いたいことを言えなかった時の自己嫌悪、それらをバネにそれこそ血の滲むような努力の道を歩むこと。その末に到達できるレベルがビジネスの世界で真に闘えるレベルだと心得た方がいいというのが実感です。

こんな話を聞いたことがあります。日本から出張でアメリカに来たビジネスパーソン。初日にホテルにチェックインして休んでいると、もう夜の12時近くだというのに隣の部屋からテレビの大きな音が聞こえてくる。うるさいアメリカ人だと、怒りを抑えながら隣の部屋に電話をかける。

日本人：”What time is it now?” 今何時だと思いつているんだ、というつもりで、ホワットタイムイズイットナウ↑と尻上がりの口調で言ってしまった。すると、

アメリカ人：”Well, it’s midnight.”

日本人：”I see. Thank you very much. Have a good night sleep!”

と電話切っ飛ばし、切った後思い切り自己嫌悪に陥ったとか。しかし電話する勇気は褒め讃えたいです。

私にはどうしたらビジネスで使える英語を身につけたらいいのか、具体的な方法論を述べるほどのレベルには達していないので、残念ながら皆さんにはアドバイスはできません。結局は試行錯誤して自分の方法を見つけるほかはないのでしょう。勉強したことはいつか必ずどこかで役に立つと信じて。

英語を身につけると同時に相手との思考習慣の違いを意識することは大切です。我々はなにかを言う前に言い訳を並べたり、前置きを言ってから話し始めることが多く見受けられますが英語ではまず、言いたいことを言ってそれからその理由を続けていく。つまり、’why - because’ のロジックを頭において相手の話も聞くし、こちらの意見の表明もするということです。英語の思考過程は why - because だと認識して日本語の思考過程からスイッチを切り替えることがとても大切だと思います。Why とたずねられたら屁理屈でもいいから応える、おかげで私もかなり理屈っぽくなりましたね・・・

何故相手のやり方に合わせなければいけないのだと疑問に思ったりもします。しかし国際社会では我々のコミュニケーションの仕方はマイノリティーと考えた方がいい。「私たちは国際社会の中で、少なくとも少数派であるという自覚を持つ必要がある。またそこで勝負をするなら、多数派に合わせていかなければならない局面が多々出てくることも間違いない。ただ、それは、多数派のコミュニケーションをマナーとして学ばばいいのだ。(平田オリザ著「わかりあえないことから」)」この言葉には勇気付けられたし、感動しました。洋食屋に行って箸で食うひとはいないはず、ナイフとフォークを使って食事するでしょ、これと一緒にじゃないかと。更にも言います。「魂を売り渡すわけではない。相手に同化するわけでもない(平田オリザ著「わかりあえないことから」)。」特に「魂は売らない」というところは全く同感です。

● 対話「マインド」を身につける

日本人の強みは友好関係にある時に発揮されます。「おもてなし」の心はこのことをよく表していると思います。しかしビジネスには利害関係がつきもので利害や意見が対立した時、日本人の強みが弱みに転ずるように思います。対立関係に立った時には「謙遜」や「配慮」や「遠慮」や「沈黙」は不要です。邪魔です。対立のゲームではそのような振る舞いはかえってマイナスだと心得るべきです。「ロジック」と「フェアネス」がグラウンド・ルール。にこやかな表情も対立したらサッと変えることが「印象管理(Impression Management)」では鉄則です。対立しても笑顔では困るのです。

なんとしてわからせたい、わかってもらいたい、そういう努力を惜しまず、自分の考えをわかりやすく説明して相手を理解させる努力が必要で「沈黙」したらこのケンカは負けです。対立関係に立ったら「友好モード」から「戦闘モード」にスイッチを切り替えて相手に向かっていくのです。丁度、トランスフォーマーが普通のトラックから変身してアーマー(鎧兜)を身につけて闘うように。そして一旦ケンカが済めば握手すればいいのです。

Bare the teeth! 必要ならば遠慮せず、牙を剥け、という事です。相手のペースにはまったら負けます。覇権を取ろうとする相手には自分の強い思いをぶつけることはどうしても必要

なのです。直球が来たら怯まず打ち返す、Swing the bat! 経験から学んだことです、しかし、まあ、そんな気持ちで仕事をしてきたこともすっかり過去になりました。

英語はコミュニケーションの道具ではない

英語はコミュニケーションの道具なのだから通じさえすれば良いのだ、という声をビジネスの現場で幾度となく聞いてきました。でも本当に「道具」と片付けて良いのでしょうか。私はそうは思いません。

コミュニケーションで相手に伝わるのはメッセージだけではなく、表情や感情、それに相応しい言葉遣い、話すトーンや話し方、言い回し、あるいは相応しい言葉を選択しているかどうか、さらには熱意さえ伝わる。つまりその人そのものが伝わるのです。通じればよい道具と割り切っていては永遠に英語をきちんと操ることができません。

言葉は人そのものを映し出す鏡です。人は話す言葉で人を判断します。どんな言葉でも、Broken でもただ通じれば良いのだという態度は誤りです。

We are what we speak.

人は話す言葉で分かる

学ぶ以上は単に通じるだけではなく相手の心に響く、相手が耳を傾けてくれる内容をもったそんな英語を目指したいものです。そのためには英語そのものも深く学ぶこと、それに劣らず語るべき内容をしっかりとつことが必要だと痛感しています。

2 趣味の英語

現在の関心事

「1 ビジネスの英語」ではビジネスを成功裡に遂行するためには英語そのものへの取り組みだけではなく、話そうとする対話のマインドも大切だと申し上げました。そのように考えたことから、どうしたら臆せず自己主張ができるかに心を砕いてきたのですが、リタイアした現在、マインドというよりは関心は英語そのものに移ってきています。

現在の英語に対する関心事は「自分の意見や考え方を英語人に対して、どうしたら正確に、心に響くように、そしてストレスなしに届けられるか、そのような英語をどうしたら身につけられるのだろうか」英語らしい英語の追及ということに尽きます。英語人の話を聞いてしばしば感ずることは「こうした言い回しは自分の発想にはないな」とか「うまい言い方をするものだ」など感心するばかりです。もちろん、英語を聞いたり、文章に書かれたことを読んだり理解することは比較的正確にできるのですが、英語人の発想に基づいて英語を頭の中で組み立てて、その英語を瞬時に口をついで出すのは私にとっては至難の技です。しかし、これがまさに目標とするべきレベルだと心得ています。

そうしたレベルを目指すためにはどう英語に取り組んだら良いのか。英語への関心は学生の頃に遡るのですが、特に英語を専門に勉強や研究をしてきたわけでは全くありませんので、どんなアプローチが正しいのか実はよくわかっていないのです。そんな素人の私が今回ふと思いついてとったアプローチは次のようなものです。

言語が世界を規定する

サピア・ウォーフ仮説というのを聞いたことがあるでしょうか？学生の頃、初めて耳にしたサピア・ウォーフ仮説には強い衝撃を受けたことを覚えています。ごく簡単に言えば、事象の捉え方はすべての言語で異なり、人間の思考や行動は用いる言語に規定されるということで、これは言語相対説とも呼ばれています。サピアとウォーフの二人が提唱したこの仮説には「言語によって、世界の見え方ないし切り取り方は違って来る」という意味があるといえます。つまり日本人と英語人では見える世界や事象の認識が異なるということです。言い換えれば、見えている世界は表現する言語の様式に規定されるということなのです。

これは当時一世を風靡するような仮説だったように記憶しています（あるいは間違っているかもしれませんが）。その後、「言語・思考・現実」というウォーフの著作（講談社学術文庫、1993年）を読んだのですが、残念ながら難解でよく理解できなかったことだけは覚えています。この仮説に対してはかなり懐疑的な評価も出されているようです。例えばガイ・ドイッチャ

一の「言語が違えば、世界も違って見えるわけ」という本（早川書房、2022年）を読むと「ウォーフの派手な主張の大半はいんちきだ」ときき下ろしています。ただし、一方でウォーフの「言語が思考に影響しうる、という考え方を安易に切り捨てるべきではない」や「言語は私たちが世界を知覚するためのレンズとして機能する事もありうるのだ」とも述べています。

言語学について素人なので両論を評価することはできないのですが、日本人と英語人では見える世界や事象の認識が異なるというのは英語人との付き合いの経験からなんとなく理解できるような気がしています。もし英語人の世界の見え方、事象の認識が日本人と異なるならば、英語人の事象の認識の仕方を学ぶことで、それをもとに英語を組み立てることができれば、英語人にとってストレスなく受け取れてしかもわかりやすい、より良いメッセージを日本人も作ることが可能となるのではないかと思うのです。

英語人の「時」と「意識・心」についての認識

そこで第一の視点としては「時」が英語ではどのように切り分けられているかを見てみることにしました。時の捉え方については、わたしたちは「現在」を起点にして、すでに終わってしまった出来事を「過去」のこととし、これから生じるであろうことを「未来」のこととしています。そしてそれぞれの言語の持つ文法の様式によって時を表現します。日本人なら過去のことであれば「昨日、雨が降ったね」とか未来ならば「明日は雨が降るね」という形で時がわかる形で表現するのです。日本語の場合、時を表す文法表現は過去形、現在形、未来形ですが、文法としてはあまり厳密に規定されいまいやかなり曖昧である、あるいは自由度が高いと言ってよいように思います（ただし、日本語文法からこれが正しいのかどうか検証はしていません）。一方、英語の場合には過去形、過去完了形、現在形、現在完了形、未来形、未来完了形などがあり、英語人は日本人より時の捉え方がより細かく厳密であるように思えます。つまり、時の捉え方に応じて時制を日本語以上に厳密に使い分けられていると言えます。したがって仮にわたしたちが英語人の時の捉え方を身につけることができれば私たちの英語はより英語人の英語に近付くのではないだろうかと思うのです。まずは英語人の時の捉え方をみてみたい。

第二の視点としては英語人の「意識」なり「心」があることを表現しようと文法表現に載せる際のどのように関与して言葉を選ぶのかをみてみたいというものです。

日本文学を翻訳する英語人の認識へのアプローチ

そのためにどうするか。

第一の視点からは「時制 (Tense)」を、第二の視点からは「助動詞 (Auxiliary Verb)」の中の「Would」を取り上げることにしました。この「Would」は心の中で想定した事柄、個人的な回想、感情の主観的な叙述のようなものに多用されているし、過去現在を表すのにも使われており、時制とは切っても切れない関係にあると思ったからです。

次に時制・助動詞で何をどうしようとしたか。

日本語の時制の使われ方を起点して英語の使われ方を対照する。つまり、日本語で書かれたテキストと英語人が英語に翻訳したテキストの二つを対照するという方法です。英語人は日本語を翻訳するに際して、伝える相手の英語人が最もよく理解できると考えられる方法で時制のシーケンスを捉えて翻訳するはずだ。だからこの時に使われる時制の使い方をおさえれば日本人も英語人と同様な時制の捉え方ができて、英語に変換できるはずではないか、と考えたのです。同様に心の動きなどを表現するのに日本語から Would をどう使おうとしているかを押さえるということです。この目的のためには適切なテキストを選択する必要がありました。

そして具体的な時制と助動詞の使われ方を日本語の現代の文学作品でみることにする。

その際、英語人による翻訳のある日本の小説を選ぶ。なぜ小説か。小説は私たちが普段お互いに気持ちを伝え合っていること、例えば昨日どこで何をしたとか、誰かと話して嬉しかった、悲しかった、腹がたった、考えさせられたとか過去の出来事や今後はこんなことを計画しているとか実行しようとしているとか、の過去、現在、未来に関する「物語」だと考えたからです。心の機微のようなものや物事を伝える際の細やかなニュアンスなどを感じさせるのはやはり文学作品だと考えたからです。

日本の文学作品はかなり翻訳されていますが、英語人による翻訳が二種類以上となるとそれほど多くはないようです。翻訳が複数あるものとしたのにも理由があります（「一応の仮説」の項参照ください）。夏目漱石の「坊ちゃん」は Alan Turney 氏による訳と Umeji Sasaki 氏による訳があります。しかし日本語の原文を見てこの目的には相応しくないと判断して断念しました。あまりにも古色蒼然としていると感じたのです。それで色々と当たってみた結果、選んだのは村上春樹のデビュー作の「風の歌を聴け（1979年）」でした。村上春樹の作品は世界中各国で翻訳されている日本の誇る作家ですが、英語で複数の翻訳がたくさんあるかということとはそれほど多くはありません。この作品は複数翻訳されている村上春樹の中の一つでした。1987年に出版された Alfred Birnbaum 氏による翻訳（翻訳 A とする）と 2015年の Ted Goosen 氏による翻訳（翻訳 B とする）がそれです。この作品は文庫本で 160 ページほどで長さであり、文体は彼の作品を読んだ人ならお分かりいただけるように現代日本語の口語体中心に書かれており、かつ比較的わかりやすい。一方で行間を読むことも求められる、そうしたことから選択しました。これでテキストは適切な選択ができたと思っています。

最後に実際の日英の対照方法です。注目したのは時制の中でも過去完了形です。日本語文法にはないこと、そして日本人にとって難しい使い方の一つが過去完了型であると考えたからです。具体的対照方法は、まず英語翻訳 A から過去完了形を用いた文章をピックアップする。それに該当する文章を翻訳 B から探し出して時制を確認する。その上で翻訳された日本語原文の該当箇所を確かめ、どのような表現をしているかをみることにしました。

例えば次のように進めます。

まずは「翻訳 A」の過去完了形の使用されている文章をピックアップする。

「When the Rat **had talked** himself out, he pulled a tissue out of his pocket and blew his nose loudly. Just how serious he was about all this, I couldn't quite gauge. (p.14)」

次に「翻訳 B」の同じ箇所を見てみる。すると翻訳 B も過去完了形であることがわかる。

「He pulled out his tissue and blew his nose. He' **d said** everything he wanted to say, but how seriously was I supposed to take him? I had no idea. (p.13)」

その上で「日本語の原文」にあたり、過去完了形に相当する箇所を見つける。それを確認した上で、なぜ翻訳は過去完了形で表現したのかの理由を考えてみる。日本語の表現はどのようなものになっているかをみて、次に過去完了形を取るべきであると翻訳者に思わせるような「標識」が日本語の原文上にないかどうかを検討する。

「鼠はしゃべりたいことだけをしゃべってしまおうと、ポケットからティッシュ・ペーパーを取り出しつまらなそうに音を立てて鼻をかんだ。鼠が一体どこまで真剣なのか、僕にはうまく把握できなかった。(p.17)」

助動詞についても同じ方法を取りました。この作業を延々この小説の最後の文章まで続けて 160 ページを全てを日英対照して英語人の時制・助動詞の選び方を検討してみたのです。

一応の仮説

この作業をするにあたって次のような簡単な仮説をいちおう設けました。もともと英語翻訳を複数参照したいと考えたのは英語人であればおそらく時の捉え方、心の動きは同じであろう、したがってそれを英語の文法様式にしたがって表現しようとするれば「**翻訳者が違っても同じ時制を用いるであろう**」また感情表現には「**同じ助動詞を用いるであろう**」という第一の仮説です。日本語を翻訳する際、その判断のベースとなる「何かしら『標識』が日本語にあるはず」ではないかというのが第二の仮説です。

仮に「標識」を特定できるとすれば、それが仮説を通じての成果になりますし、標識さえわかれば日本人にとって英語を正しく構成できると考えます。助動詞についても同様に考えま

した。

日英対照結果

1 時制

時制についての日英対照結果は以下表 1 の通りです。

表 1

翻訳 A と B の組み合わせ	件数	%
過去完了形 x 過去完了形	43	36
過去完了形 x 過去形	50	42
過去完了形 x 句表現	12	10
過去完了形 x その他	14	12
合計	119	100

日本語原文に対して翻訳 A と翻訳 B が共に過去完了形であった文例を見ると 43 例ありました。一方の翻訳は過去完了形で他方の翻訳は過去形という文例が 50 例ありました。

同じ原文で翻訳 A は過去完了形で表現し、翻訳 B は過去形という例を以下に掲げます。

翻訳 A

Rumor had it that the Rat' s father had at one time been miserably poor. That was before the war.

Then just as the war was about to break out, he **managed** to buy into chemical plant and began to sell repelling plaster. (P. 86)

翻訳 B

Rumor had it that Rat' s father had been penniless before the war. On the eve of hostilities, though, he **had managed** after much difficulty, to lay his hands on a small chemical factory, where he began producing insect repellent cream. (p.100)

原文

噂によると鼠の父親は昔、ひどく貧乏だったらしい。戦前のことだ。彼は戦争の始まる直前に苦労して化学薬品の工場を**手に入れ**、虫よけの軟膏を売り出した。(p. 104)

2 Would

助動詞中の「Would」についての日英対照結果は以下表 2 の通りです。

表 2

翻訳 A と B の組み合わせ	件数	%
Would x Would	14	18
Would x 現在形	30	41
Would x 過去形	15	21
Would x その他	15	21
合計	74	100

日本語原文に対して翻訳 A と翻訳 B が共に「Would」を用いた文例を見ると 14 例でした。ちなみに一方の翻訳は「Would」に対して他方は現在形という文例が 30 例あり、他方が過去形の文例は 15 例でした。

同じ原文で翻訳 A も翻訳 B も「Would」で表現している例を以下に掲げます。

翻訳 A

His favorite novel was *A Dog of Flanders*. “C’ mon,” he’ d say, “Do you really believe a dog **would die** for a painting?” (p.101)

翻訳 B

Hartfield’ s favorite book was *A dog of Flanders*. “Can you believe,” he is quoted as saying, “that a dog **would really give up** its life for a painting?” (P.118)

原文

彼が一番気に入っていた小説は「フランダースの犬」である。「ねえ、君。絵のために犬が死ぬなんて信じられるかい？」 (p.120)

次に同じ原文で翻訳 A は最初の文章は「Would」と表現し、次の文章は現在形で表現しているが、翻訳 B は逆に最初の文章は現在形で表現し、次の文章は「Would」で表現している例を以下に掲げます。

翻訳 A

“I slit open the belly, but all I found was a handful of matted grass in one the stomachs. I put the grass in plastic bag and took it home with me. Put it on my desk. Then whenever something went wrong, I **would just stare at that lump of grass and think**. Why do cows **chew and chew and regurgitate and rechew** this disgusting stuff over and over again?” (P.109)

翻訳 B

“When we cut open its abdomen all it contained was a single cud. So I put the cud in a plastic bag, took it home, and set it on my desk. Since then, whenever things get tough, I **look at the lump of half-digested grass and wonder**, why **would a cow take such pains to regurgitate and chew** such an unappetizing, pathetic thing over and over again?” (P.129)

原文

「腹を裂いてみると、胃の中には一つかみの草しか入っていなかった。僕はその草をビニールの袋に入れて家に持って帰り、机の上に置いた。それでね、何か嫌なことがある度にその草の塊を眺めてこんなふうに考えることにしているんだ、何故牛はこんなまずそうで惨めなものを何度も何度も大事そうに反芻して食べてるんだらうってね。」(p. 130)

結果の考察

第一の仮説検証

時制において、日本語原文に対して一方の翻訳が過去完了形なのに他方の翻訳は過去形という文例(50例)が翻訳Aと翻訳Bが共に過去完了形であった文例(43例)を使用例でうわまわるといふ結果になりました。この結果は「英語人の時の捉え方は同じだろうから翻訳者が違っても時制は同じになるはず」と考えた第一の仮説をまったく裏切るものとなりました。

また助動詞「Would」についても時制と同様に、日本語原文に対して一方の翻訳は「Would」なのに他方は現在形という文例(30例)が翻訳Aと翻訳Bが共に「Would」を用いた文例(14例)を大幅にうわまわるといふ結果になりました。この結果は「英語人の感情の主観的な叙述は同じだろうから翻訳者が違っても使用する助動詞は同じになるはず」と考えた第一の仮説を時制同様、まったく否定するものとなりました。

物事を捉えてこれを意識に取り込んで次に文法様式に載せて表現する際の意識の関与度合いは「時制」よりも「Would」において大きくなるという結論は導かれると考えます。また、より厳密に時を捉えるはずだと考えた「時制」についても英語人翻訳者が日本文の解釈する余地でその時制を選択する幅が当初想定していたより広いのだということも一つの結論として言えると考えます。

第二の仮説検証

時制において、翻訳Aと翻訳B共に時の捉え方から過去完了時制選択した場合の日本語原文の該当場所を見ると、上記の例では「・・・しゃべってしまうと、」という場面で日本語を過去完了にしていることがわかります。なぜ英語人翻訳者AもBも過去完了形を選択したのでしょうか？私であれば過去形を選択していたかもしれません。時間の経過は前後から判断が可能だと考えるので過去形でも問題があるようには思われませんが、英語人翻訳者が二人とも過去完了形にしています。

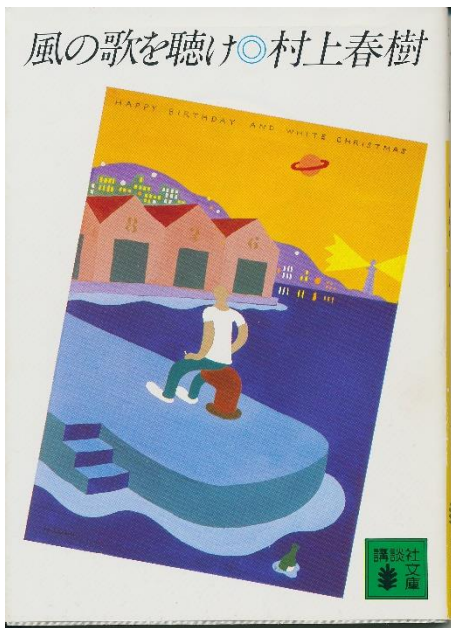
過去完了形を取ったということは何かしら意味づけがあったのでしょうか。あるいは事象の経過の前後関係を明確にするという意味があったからなのでしょう。時制区分が日本語より多い英語を自国語として使う英語人はそれだけ細かい時制区分に敏感になるのでしょうか。これについて、私は答えを持ち合わせません。仮に日本文に英語人にとって過去完了だと判断するような「標識」が、この場合は「・・・と、」というのが前後を示すように思われたとすれば、これが「標識」と言えないか。しかし、文例が少ないことから早急な判断はできず、「標識」については「Would」と共に明確には特定できない残念な結果となりました。

まとめ

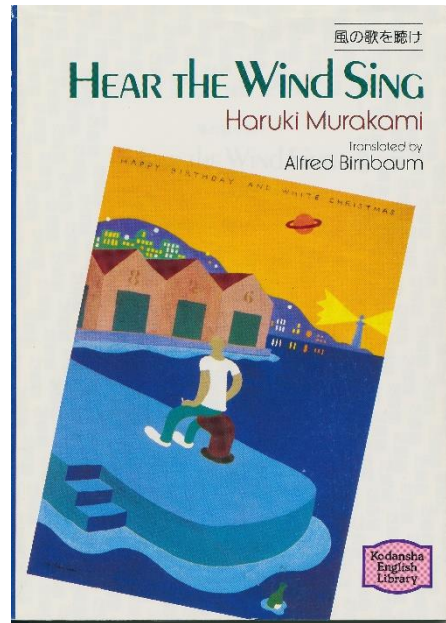
今回のような日英対照という試みは言語によって「世界の見え方が異なる」というサピア・ウォーフ仮説に改めて興味をもち、それを確かめたいという好奇心に基づくものでした。気付かされたことのひとつに、例えば時の捉え方にしても、時制という観点にもそれをみる人の意識というものが大きく関与しており、決して機械的に決められるようなものではないことがわかったということです。さらに、英語文体論、中でも視点、語法や時間の移動といった要素も翻訳者が考慮した上で翻訳しているので単に英語文法上だけの問題では捉えられないことも知り、言葉の奥行きにも驚かされました。

さて、本稿を纏める作業を通じて、英語の道はあらためて“The Long and Winding Road”であることを思い知らされました。それでも、今後も一步一步と歩みを進めたいと考えています。

日本語原文



翻訳 A



翻訳 B

